

2023年 May 5月

マナ通信



今月のマナ通信

- ◎3月の週日の聖書日課 (ルカの福音書、エゼキエル書、他)
- ◎土曜日・日曜日の学び 主イエスの自己証言 からの感想です。

ルカは言います。人間は二つに分けられる。アダムの罪と死の領域にある者と、イエスによる義認と恵みの領域にある者です。これは我々にとって死活問題だと、たとえを用いて教えています。

「イエスはこのようなたとえを話された。「ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えておいた。そして、実を探しに来たが、見つからなかった。そこで、ぶどう園の番人に言った。『見なさい。三年間、このいちじくの木に実を探しに来ているが、見つからない。だから、切り倒してしまいなさい。何のために土地まで無駄にしているのか。』番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。それで来年、実を結ばばよいでしょう。それでもダメなら、切り倒してください。』」(ルカ13:6-9)

神はわたしはあなたを諦めないと言って、私たちが悔い改めて神のもとに戻ることを欲しています。なぜかと言うと、人間を愛しておられるからです。神は人間を霊をもち、自分に似た者とし、その上、地上の生きものを支配する権限を与えられたのです。

だが、始祖であるアダムがサタンの誘惑により「禁断の木の実」を食べてしまったのでした。それは善悪の判断は神がするもの、その神の領域を侵してしまったのです。とんでもない罪を犯しました。そのため、エデンの園から追い出され、神との交わりが無くなってしまい、人間に死が襲ったのです。霊的に死に、肉体的にも死ぬようになったのです。

しかし、神は罪人である人間のためになだめの供え物となって下さり、我々人間のために十字架に掛かり死んで下さったのです。それにより、神は我々信じる者の罪を赦され義人と認めて下さいました。

イエスが十字架刑を求刑され執行された時、歴史上では、イエスを死に追いやったのはユダヤ宗教家と群衆であり、ローマ帝国だと言っていますが、しかしそれは神の視野において考える時イエスを殺したのは、時代と空間を超えた、世界の全人類です。

ここで理解しがたいのは、神の御子が十字架に掛かれた時代には、私たちはまだ生まれていなかったことです。それは、人間の常識や知識、経験は神の前では通用しません。神は全知全能であり、偏在であります。神は未来のことがわかるのです。

それが証拠に、この世の出来事は神が天地を創造なさる前に全て計画されていて、今実行されているのです。従って二千年前に十字架に掛けられた時、神様の計画の中に、未来の我々も入っていたのです。全人類がです。

ありがたいことに、聖霊によるバプテスマによって我々はイエス・キリストと結びつけられました。我々の中にイエス・キリストが住んでいて下さいます。従ってイエス・キリストに起こったことは我々にも起こります。人は、神と共に、神の恵みの支配の中で生きるようになりました。

カルバリ山には、イエスを中心にして三本の十字架が立っていました。罪人の一人はイエスになぜ自分と我々を助けないんだとののしります。しかし、もう一人は罪を悔い改め、「我々は罰せられても仕方がないが、この方は、悪いことは何もしていない。」そして言った。「イエス様、あなたが御国に入られる時には、私を思い出して下さい。」

イエスは言います、「あなたは今日、私と一緒にパラダイスにいます。」 私は思います。クリスチャンは皆、三本柱の最後の罪人であること。切り倒されるいちじくの木にならないように、人をのしる前者の罪人にならないように、一刻も早く一人でも多く、改心して神の恵みの中で生活出来ることを願います。(畑中伸之)



そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているかが分かっていないのです。」(ルカ23:34)

イエス様が十字架上で、父なる神様に執り成して下さっているのは、ご自分を十字架にかけている者たちに対してです。その中に今日の私もおります。

翻って、自分がキリスト者にならせていただいたのは、ひとえに神様の働なしの恵みのためだけではないと知っているとしたら、私の中に少しの高慢もあるはずが無いのに、あなたは何も分かっていないねと、人から言われて悲しんだり落ち込んだりするはずはありません。又、傷ついたなどと言えるはずありません。ああ……と十字架を見上げて祈ります。

自分の様々な権利へのこだわりなど残っているはずがないのですから、「神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らず、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか」と語られました(ロマ2:4)。(福島三弥子)



ルカ15章25節からの放蕩息子のたとえは、もう何度も読み、また説教でも聴いてきましたが、9日の「みことばをあじわおう」を読んで新たな気づきを与えられました。兄を宗教エリート、それに反して弟は好き勝手な事をしてきました。

そんな弟が困窮して父の元に帰ってきたのです。帰ってくればどんなことをしても助けてやりたいのが親でしょう。

「おまえは好き勝手に出て行き、今になって頼ってくるとはなんだ！」とでも言えば、兄の怒りは収まったのでしょうか。

しかし父は何も言わず大歓迎しました。今まで自分の身に引き寄せて考えてきませんでした。でも自分は受洗してこの方一度も教会から離れたことはありませんでした。何年も教会から離れていて、又来られるようになったり、定年になったのでと、礼拝出席されるようになる方もおられます。

ついこの物語に重ねてしまいました。兄のような気持ちを起こさないように教えられました。しらすしらす傲慢になっています。神様の大きな愛に感謝です。

エゼキエルの14章3節……自分たちの偶像を心の中に秘め、自分たちを不義に引き込むものを顔の前に置いている。

心の中に秘めと言うのが、チクリと刺さりました。たしかに隠し持っているから、いつも吟味して悔い改めねばならないと気づかされました。

神から引き離すものを、顔の前に置くことのないよう、日々聖霊の助けを祈ります。(広瀬裕子)

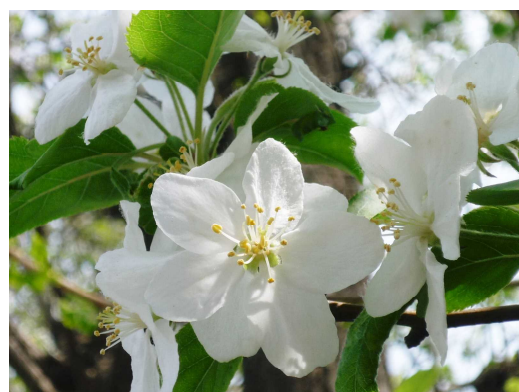
訂正があります。先月の感想文で、「御霊によるバプテスマであり、私を2000年前の主の死、葬り、よみがえりに一体化し」と書きましたが、「バプテスマによって、私たちはキリストの死へつきあわせられた。それで、私たちはキリストとともに死んで、葬られました。そして、キリストとともに死んだ以上、キリストの復活とも同じようになる」というように訂正します。バプテスマによって、キリストの死、葬り、復活へつき合わせられるのではないようです。

私たちは、キリストの死にバプテスマされ、キリストとともに葬られました。そして、キリストが御父の栄光の力によって死者の中からよみがえられたように、キリストとともに死んだ以上（おそらく、キリストに働いたと同じ力が私たちにも働いて）キリストの復活とも同じようになり、いのちにあって新しい歩みをするようにされたのだと思います。

ということと罪との関係でいえば、私たち（の古い人）はキリストとともに死んでしまったので、罪とは何の関係もなくなり、罪の領域の外に出されています。罪は死人、また、罪の領域の外にいる人には何もできません。

さらに、キリストとともに死んだ者はキリストの復活とも同じようにされて、私たちは別の領域、罪の及ばない領域にキリストのいのちで生きるようにされている、ということのようです。

驚くべき立場の変化が私たち信者に起こっています。それを実際の歩みにしたいので更に学び続けてゆきます。（高橋美枝）



だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」
（ルカ15:32）

放蕩息子のたとえは何回も読んで分かった気になっていましたが、主の愛がどのようなものであるか、今回「みことばを味わおう」に書かれたメッセージで改めて教えられました。

弟息子は心底反省した様子もなく帰郷しました。それを無条件で駆け寄って抱きしめて喜んだ父親。二人とも甘すぎる、と。しかし弟息子の「家に帰った」ということが重要だったのです。

主はわたしたちに正しさをお求めになっているのではなく、「まず帰っておいで」と招いてくださっていると思います。

その対比として、自分の正しさを主張する兄がたとえに出てきます。私たちは主の御前に正しい者、完全な者にはなれません。正しいか正しくないかではなく、ただ主に帰り、主のもとにおらせていただくことが大切なのだと思われました。（永井亮子）

イエス様の弟子の一人が言いました。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」私も主イエス様に求めました。祈りを教えてください、と。

〈みことばを味わおう〉で教えられました。

イエスが弟子に教えた祈りは「父よ」という呼びかけから始まります。自分の願い事ではなく、神様との人格的な交わりが祈りの中心です。イエスは言われました。

「祈るときには、こう言いなさい。

「父よ、御名が聖なるものとされますように」

世界のすべての人が父なる神様をほめたたえ、また、クリスチャンたちが神の栄光を現して生活できますように。

「御国が来ますように」

救われた者が神の支配の下で生活できますように。また救われて神の国で生きる者たちが起こされますように。続いて自分自身のことを祈ります。

「私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください」

この祈りは自分の生活に必要なものは、すべて神が与えて下さる、という信仰の告白です。

「私たちの罪をお赦してください」「私たちも、私たちに負い目のある者をみな赦します」と続きます。

最後は「私たちが試みにあわせないでください」自分が神様を悲しませるようなことに陥らないようにと願う祈りです。

〈主の祈りは常に「私たち」の祈りです〉〈主の祈りは自分の生き方を問われる祈りです〉
主イエスご自身、聖霊によってこの祈りを祈り、生きていかれました。天の父の栄光のため、十字架の道を歩み、私たちが神の国で生きる道を開くため、あらゆる誘惑と試みを退けて、十字架の死を受け入れられました。

そしてご自分を十字架につけた者のため「父よ、彼らをお赦してください」と祈られました。

主の死、復活、昇天を経て、教会に聖霊が与えられました。

私も聖霊によって主の祈りを今日も祈り、示された信仰の道を進みたいです。（木村邦夫）

主は答えられた。『マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。』（ルカ10:41-42）

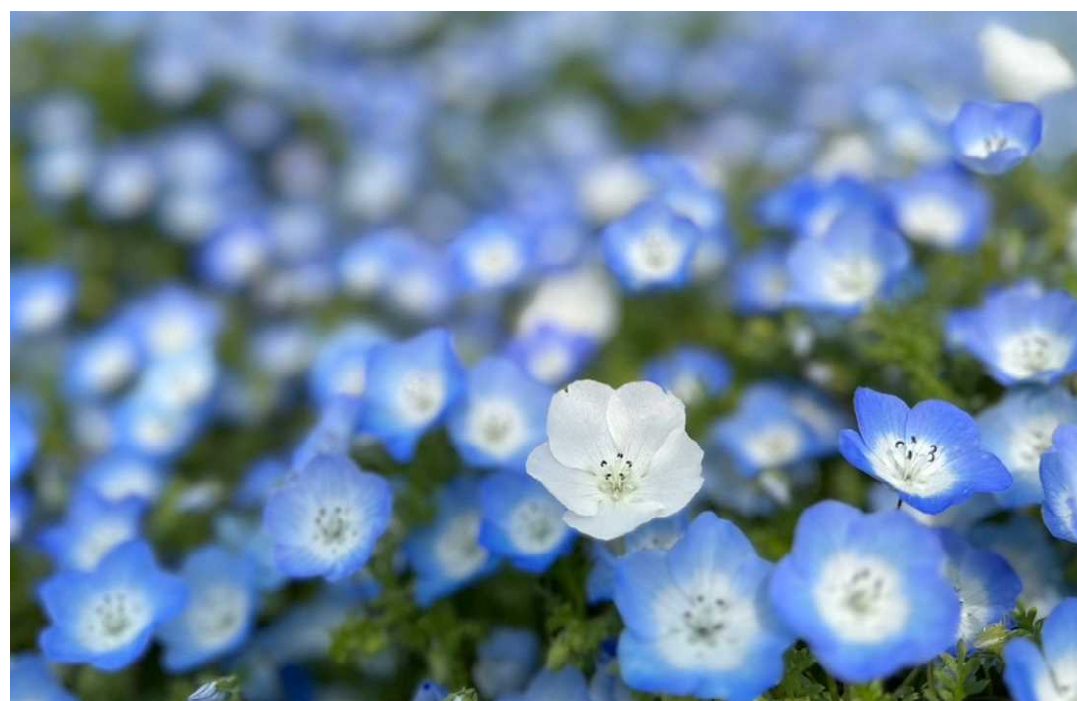
この聖書箇所に来ると、いつも、私はマルタのようだと思わされます。

『必要なことは一つだけです。』神との関わりの中で最も重要なことは、神との交わりであり、その交わりとはみことばを聴くことから始まる。と、教えられました。

私も思い煩わないで、マリアのように、主の足元に座って、みことばを聴くことを大切にしたいと思います。（外處トミ）

還暦を 迎えて 想う 明日の日を
今日よりもっと 主に近づかん

2023年3月29日



あなたがたに言うておく。神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人であって、あのパリサイ人ではなかった。おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう

（ルカ18:14）

イエス様は祈りについてお話しになる時にこう言われました。生きてると自分の罪深さ、愚かさ、至らなさに打ちひしがれることがあります。それでも神様は義としてくださると言われます。なんと感謝なことでしょう。（外處光歩）

主は答えられた。『マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。』(ルカ10:41-42)

日々の忙しさに追われて、心が落ち着かないことがあります。主は「必要なことは一つだけです。」とみことばを語ってくださいます。

神様との交わりがいちばん大切であることを覚え、いつも主に目を向けて、主にあって歩んでいけたら幸いです。(外處結実)

わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。(ヨハネ15:10)

この御言葉から、主イエス様ご自身も父なる神様から戒めを受けて守られていたことを見せられます。主イエス様は父なる神様からの愛と恵みに満たされていましたが、この世からは多くの苦しみを与えられました。

特に私たちの罪の身代わりとなられた十字架の上での苦しみは、私たちには耐えられない苦しみだったことを覚えます。それでも、主イエス様は父なる神様の愛に完全に信頼して身を預けられました。

まさに、いかなる状況の中でも父なる神様の愛の中にとどまられたのです。この世は苦しみばかりではなく、いろいろな誘惑や汚れにも満ちており、私たちを神様の愛から引き離そうとしますが、力強い神様の御愛はいつも私たちを御許に引き戻して下さるのです。

自分自身の頼りなさを強く示されると同時に、その力強い御愛に感謝をするばかりです。父なる神様は愛と義の方であり、やがて訪れる永遠の新天地では父なる神様の愛にとどまる者だけが存在する世界を造られます。

神様に逆らって愛にそむいた天使たちが完全に滅ぼされる時が来ます。神様はその愛の中にとどまることの大切さを途方もなく長い時間の中で証明されるのです。

父なる神様の愛のとどまること、御子イエス様もすべてをかけて守られたことであり、それは私たちにとっても永遠に何よりも大切なことなのです。(外處徳昭)

イエスは弟子たちに対して、次のように語られた。「ある金持ちに一人の管理人がいた。この管理人が主人の財産を無駄遣いしている、という訴えが主人にあった。主人は彼を呼んで言った。『おまえについて聞いたこの話は何なのか。会計の報告を出しなさい。もうおまえに、管理を任せておくわけにはいかない。』管理人は心の中で考えた。『どうしよう。主人は私から管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力はないし、物乞いをするのは恥ずかしい。分かった、こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、人々が私を家に迎えてくれるようにすればよいのだ。』

そこで彼は、主人の債務者たちを一人ひとり呼んで、最初の人に、『私の主人に、いくら借りがありますか』と言った。その人は『油百バテ』と答えた。すると彼は、『あなたの証文を受け取り、座ってすぐに五十と書きなさい』と言った。それから別の人に、『あなたは、いくら借りがありますか』と言うと、その人は『小麦百コル』と答えた。彼は、『あなたの証文を受け取り、八十と書きなさい』と言った。主人は、不正な管理人が賢く行動したのをほめた。

この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢いのである。わたしはあなたがたに言います。不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。最も小さなことに忠実な人は、大きなことにも忠実であり、最も小さなことに不忠実な人は、大きなことにも不忠実です。ですから、あなたがたが不正の富に忠実でなければ、だれがあなたがたに、まことの富を任せるでしょうか。また、他人のものに忠実でなければ、だれがあなたがたに、あなたがた自身のものを持たせるでしょうか。どんなしもべも二人の主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛することになるか、一方を重んじて他方を軽んじることとなります。あなたがたは、神と富とに仕えることはできません。』(ルカ16:1-13)

ルカ15章において、「迷える羊が見出された、あるいは放蕩息子が家に帰って来た」。それからどうなるか。その息子はどういうふうにして生きていったのか、毎日どんちゃん騒ぎを続けて行ったのか、神を信じ救われた者はどういうふうにして生きていく者なのでしょうか。16章の不正な管理人の譬えは、そのことを主が私たちに教えておられるようです。

この箇所はルカ福音書の中で最も難解な箇所です。なぜ難解かと言うと、不正行為を推奨しているように見えるからです。しかし、実際はそうではありません。

この不正な管理人は、主人の財産を管理するのがその仕事であったのに、その財産を無駄遣いしていました。15章の放蕩息子と同じです。放蕩息子は父親が汗水流して蓄えた財産を無駄遣いしました。そしてこの管理人は主人の財産を無駄遣いしていたのです。いずれも他の人の物を自分のために使ってしまったという点では同じです。

ところが、そのことが主人に分かってしまい、この管理人は、主人から会計報告を出すようにと言われた時、再度自分の才覚を使って、自分のために悪知恵を働かせます。具体的には、主人に対して負債のあった債権者を呼んで、主人に対する負債を削ってやります。そして後で自分が首になった時、この人たちに与えておいた恩義で、自分の職を得ることができる考えたのです。

この話の衝撃的なところは、「抜け目なくやった」ことで「主人」が「不正な管理人」を「ほめた」ことです。なぜこのような不正行為を是認したのでしょうか。管理人がしたことは正しくないことでした。この後に続く節から明らかのように、この管理人は、不正行為などではなく、その「先見の明」をほめられたのです。彼は抜け目なく慎重に行動しました。将来を見越して、そのための備えをしました。



この話を私たち自身の生活に適用する際には、次の点をはっきりさせておかなければなりません。すなわち、私たちの将来は、地上にではなく、天にあるということです。この管理人が職を失った時のために友人を確保しておくための手段を講じたように、キリスト者も天に至った時に喜んで迎えてもらえるよう、主人の物や財産を賢く用いるべきだということです。

主は「この世の子らは、自分と同じ時代の人々の扱いについては、光の子らよりも賢いのである。」と言われました。これは、この世の人々は知恵を用いてこの世での将来に備えるのに対し、真の信者たちは天に宝を積む際にそれほど知恵を用いていない、という意味です。

「不正(ギリシャ語 μαμωνᾶς /マモン/不正の富)」とは「この世の富」のことです。主イエスは弟子たちにこう言われました。「不正の富で、自分のために友をつくりなさい。そうすれば、富がなくなったとき、彼らがあなたがたを永遠の住まいに迎えてくれます。」

主イエスがここで言う「不正の富」(この世の富)とは、お金だけでなく、健康も、才能も、学歴も、社会的な地位も名誉も、また子供もそうです。それらのものはすべて主が与えられたもの、いや、主から預けられ任されているもの、私たちはそれを管理する責任があるということを教えられています。そう言うわけで、10節では、「この世の富」のことを「神様から任されたもの」と考えられます。

主がここで教えておられることは、この世において私たちが神から任されているもの、それを使って信仰の友を作りなさいということです。

しかも、主はこうも言われました。「この世において神様から任されたものを忠実に管理する人は、神の国の事にも忠実であり、この世において神様から任されたものを不忠実に管理する人は、神の国の事にも不忠実です。ですから、あなたがたがこの世において神様から任された富を忠実に管理しなければ、どうしてあなたがたは本当の富を神様から任されるのでしょうか。また他人に対しても忠実でないなら、どうしてあなたがたは神様から祝福を受けることができるでしょうか。」

神様から任されたものを忠実に管理するということは、それを自分のためだけに使うのではなく、神に対し、他の人に対して用いるということです。自分のためだけに金や時間や才能を使うのではなく、神の国の前進のために使うことが求められているのです。

私たちは「この世の富」を用いて、「自分のために友を」作るべきなのです。お金や物質的な物を用いて、たましいをキリストに導き、永遠に続く友情を築くことが出来るのです。これが主イエスの教えです。天の門に着いた時、私たちは、自分が犠牲を払ってささげたり祈ったりしたことによって救われた人々の歓迎を受けることになるのです。

12節では、「他人のもの」と「あなたがたのもの」が区別されています。私たちが持っている金銭も時間も能力もすべて主のものであり、私たちはこれらを主のために用いたいものです。(福島勲)

貴重なご感想ありがとうございました。

次回は、マナ4月号の感想を5月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)